

仲間とのかかわりから、  
自己課題に向けて学び続ける子どもを育てる体育学習

## 1. 研究テーマ設定の理由

### (1) 学校提案とかかわって

学校教育における体育学習の役割は、運動に親しもうとする姿勢を育てることである。どの子どもにも運動する機会を与える学校体育は、どの子の運動意欲も高めていくという重要な役割を担っていると捉えている。運動種目の技能や戦術はもちろんのこと、ルールやマナー、場の工夫、仲間とのかかわり方といった体育の学習内容を学ばせることで、運動の特性に触れ、生涯を通じて運動に親しもうとする子どもを育てることができる。

そのためには、対象（運動種目）・他者（仲間）・自己との対話の三位一体の活動の中で、子どもたちが、運動の特性に迫るための吟味が大切であると考えている。一人で解決できない課題に向けて、仲間と一緒に吟味を繰り返していく中で、子どもは新たな発見や学びを得ることができる。

今年度、本校の体育科では、仲間とのかかわりの中で、子どもが自己課題に向けてどのような学びをするのか、その過程に重点を置いた授業展開の研究を進めていく。

#### ①体育科における協同的な学び

体育学習には、ペア学習・グループ学習・一斉学習などの学習形態があり、それぞれに良さを持っている。様々な学習場面に応じて、教師はこれらを適切に選択して学習を行っている。

ペア学習・グループ学習をすると、仲間と一緒に競争したり協力し合ったりする活動を取り入れやすくなる。また、子どもたち自身で課題を発見しその解決に取り組むことで、自主性や自発性が育っていく。仲間と一緒に楽しく運動するだけでなく、自己と他者の両者の学びが一人ひとりで学ぶ以上の習得や変容を生むと期待できる。

一斉学習については、学級全体の中で、発見した運動の工夫やコツ、頑張って取り組む子どもの様子などを伝え合う場となったり、運動のルールの確認をしたり、互いに意見交流をしたりすることができる。

どの学習形態についても、教師がより細やかなみとりと支援を与え続けていくことによって、さらにレベルの高い自主性や自発性を発揮させたり、学習活動を意欲的にさせたりすることができるのである。

#### ②体育科における焦点化のポイント

試行錯誤して考えた作戦を成功させた喜び。しっかり学んで運動のコツをつかんだ喜び。仲間と力を合わせて学んだ喜び。このような喜びのある学習経験は、子どもたちが今後も運動に親しみ続ける原動力となる。

運動の魅力や運動の力が伸びた喜びを味わわせるために、吟味のある体育学習を目指していく。そこで、体育科における2つの焦点化を取り入れていく。

1つは、課題設定の焦点化である。運動するとき、子どもたちは個々で考えた自己課題を持って取り組もうとする。しかし、一人ひとりの目指す方向が全く異なっていると、グループ単位であっても学級全体であっても学びが深まらず、本当の課題解決に至らないことがある。運動への目的意識をよ

り明確に設定し、子どもの自主性が発揮される授業展開にする必要がある。そこで、グループ、あるいは学級の学習のめあてについては、「どうすれば〇〇できるのかを考えよう」のように強い思いを含めた課題を持たせることが大切である。そして、そのための具体的なめあてをいくつか考えさせ、自己課題を持たせるようにしたい。目指す方向が共通していれば、個々の学びは吟味のある質の高いものとなり、さらには全体の課題解決として成立していくと考える。

もう1つは、課題解決の焦点化である。運動というものは、様々な要素が合わさってできている。例えば、技能面については、力の入れ具合、タイミング、力の方向、動きのスピード、身体の各部位の使い方などである。また戦術では、フォーメーション、声かけなどが挙げられる。学習が行われる中、その運動について子どもたちはいくつもの発見をし、グループ内、あるいは学級全体の場で意見を出し合い話し合うこともある〔図1〕。運動の仕方のコツ、良い動き、仲間の頑張りなどが紹介されると、子どもたち全体に伝わる。そして、出てきた意見をみんなでしっかり吟味していくことで、運動の大事なポイントが見えてくる。今までどうしてもできなかった子が突然できるようになることもある。この心地よい瞬間が体育学習の醍醐味の一つであり、仲間と共に課題を解決し、達成できたということになる。



図1. 声を掛け合いながら練習するキャッチバレーの学習の様子

## （2）体育科でめざす子ども像

本校の子どもたちの実態を見てみると、ほとんどの子どもは体を動かすことが大好きで、休み時間に積極的に外に出てボール遊びや鬼ごっこ等で仲間と楽しく遊ぶことができる。

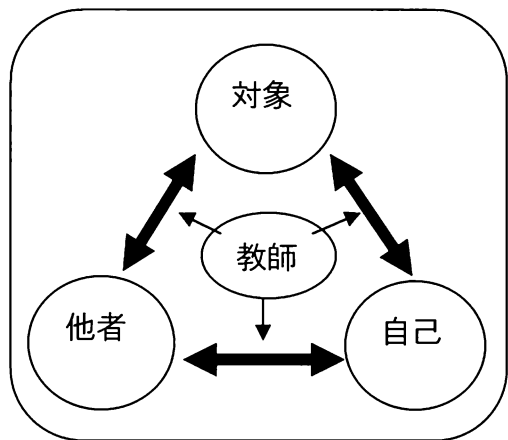
しかし、一方では、運動経験が豊富な子の中に、自分勝手なプレーをしたり仲間に不満を言ったりして一緒に楽しめない子どもがいる。また、運動が思うようにうまくできず、「自分には無理だ。」という無力感が形成されている子がいる。「失敗したら、何か言われそうだ。」と不安が生じているため、運動に消極的な子がいる。これらは、運動の特性に触れたり、仲間とかかわる楽しさを十分味わったりできていないのが原因だと考える。

仲間とかかわり合いを重視した体育学習を通して、互いに協力しながら一つの方向を目指していくことの良さに気づかせたい。そして、励まし合い教え合う温かい雰囲気の中で、子どもたちがさらに自発的な創意や工夫を重ね、進んで運動しようとする姿勢を育てていきたいと考える。

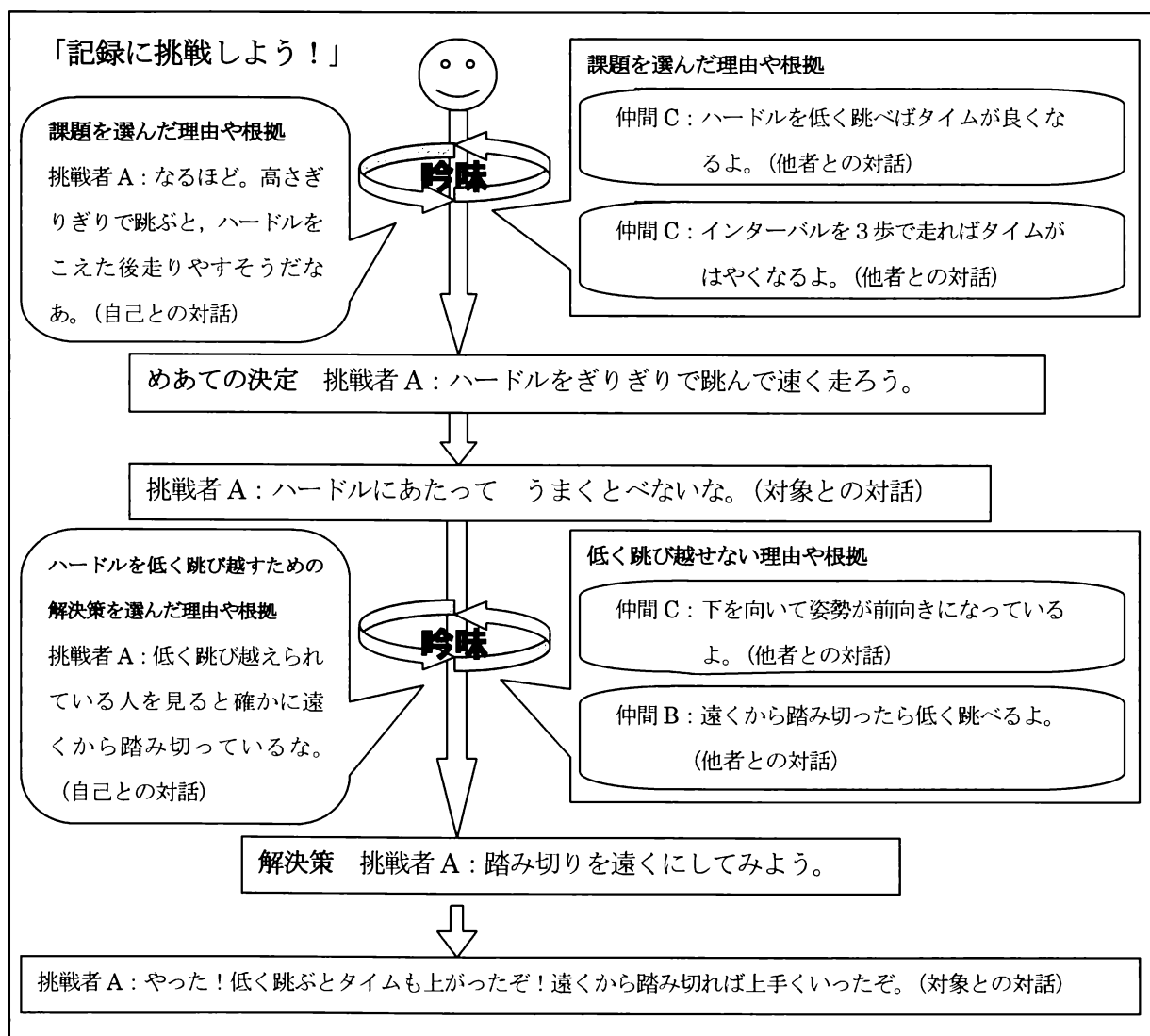
## 2. 体育学習における「学びの質の高まり」

体育学習における「学びの質の高まり」とは、子ども一人ひとりが課題を持ち、できる楽しさを少しずつ積み重ねることで「もっとやってみよう」という更なる運動意欲を向上させていくことだと考える。体育学習においても、対象（運動種目）・他者（仲間）・自己（子ども自身）が対話する三位一

体の活動が、子どもたちの学びを成熟していくと捉えている。これら3つの対話の中で、自己あるいは他者が、対象への理由や根拠を表出していく。そして、互いの思いや考えを聞き合い比較検討し合うことで、新たな気づきを生み、自己が更新されていくと考える。この過程を繰り返していくことで、課題の解決策の吟味が成され、運動の本質・真理や価値に迫ることができ、運動に親しもうとする姿勢が育つと考えている（実践例 4年生 ハードル走 参照）。吟味をより豊かなものにしていくには、子どもたちの三位一体の活動の中に教師がしっかりと入り込んでかわり、みとりと支援を適切に行っていくことが重要だと考えている。



体育学習における三位一体の活動



【実践例 4年生 ハードル走】

### 3. 研究の展望

質の高い学びを目指すために、以下のようなことを大切に研究を進めていきたい。

- 子どもの適時性を考慮し、対象との出合わせ方を工夫する。(単元構成, ルールの設定, 場の設定, グループ作り, 教具など)
- 吟味を導くためのみとりと支援を行う。〔図2〕
- 年間を通して、他の教科とも関連させながら、体育の学び方や進め方を身につけさせていく。
- 「関心・意欲・態度」「思考・判断」「技能」の3つの力をバランスよく伸ばしていく。

図2. グループの話し合いで吟味を生み出すための教師の支援



2年「ならびっこキックベースボール」の実践では・・・

ゲームで対戦チームにたくさん得点されて負けることが多いチームのことである。対戦チームを上回るたくさんの得点をする方法を考え、様々な作戦でゲームに挑んでいるが、チームの得点力アップはなかなか難しい。やはり思うように勝つことができない。教師が今のチームの様子を見て感じたことを伝えたり、メンバーからの意見を聞いたりしていると、攻めよりも守りの工夫をして失点を最小限に食い止める方が勝つための近道になることが分かってきた。守りのポジションを工夫していくことで、以前と比べ、ボールの捕り方やボールへの反応が素早くなり、無駄な失点が随分減った。そして、初めて引き分けに持ち込むことができた。

### 4. 研究の評価

方法として、実際活動している様子を観察し、毎時間、個人学習カードやグループ(チーム)ノートを書かせていながら、学級全体あるいは各グループがめあて設定の工夫によって同じ方向の学びを目指しているか(課題の焦点化)、あるいは、教材の持つ良さを味わいながら興味を持って学習できているかを常時見ていく〔図3〕。子どもたちの学びが発展し、自己の変容がどのように成されてきているかを検証していき、自己課題に向かって学び続けているかどうかを判断していく。

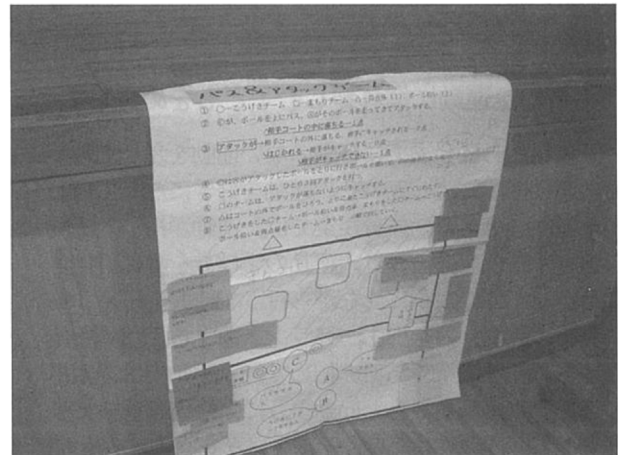


図3. 各グループのめあてを掲示。

(視覚的に子どもたちがいつも確認できるようにしておく。)

#### 参考文献

- 1) 鈴木秀人『小学校の体育授業づくり入門』学文社(2009)
- 2) 松田岩男・宇土正彦『学校体育用語辞典』大修館書店(2001)
- 3) 中村敏雄『体育のグループ学習』創文企画(1998)